

【平成 23 年 6 月 30 日】

## 事故なく快適な入浴呼び掛け

庄内総合支庁独自の取り組みとして注目されるのが、庄内保健所で行っている管内の入浴事故発生状況の調査事業だ。これまで県内で入浴中の事故の実態を把握したケースは初めて。調査の中で、入浴事故による犠牲者が交通事故よりも多いことなどを紹介しながら、県民に安全で快適な入浴生活を呼び掛けている。

調査は、2009年11月1日から1年間実施。鶴岡市消防本部と酒田地区広域行政組合消防本部の協力を得て、庄内地区で救急要請のあった事故のうち「入浴行為」などによる

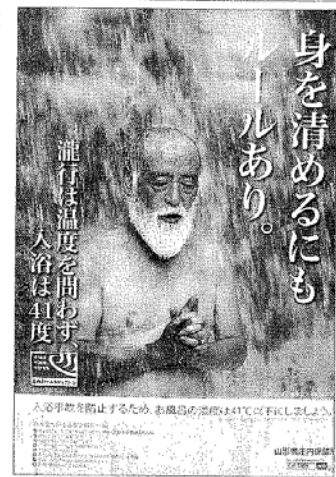
搬送者などの状況を調べた。事故件数は194件で、このうち亡くなったのは42人で、管内の同時期の年間交通事故による犠牲者（9人）の4倍以上。犠牲者は全員が65歳以上だった。平均気温が低い1～2月が発生率、死亡率とも高く、特に自宅の浴槽で事故に遭うケースが目立つという結果が出ている。

庄内保健所を中心に「41℃（よい）ふろプロジェクト」を展開。入浴講座などを開催し、急激に血圧を上げないために湯温を41度以下に設定するなど、安全で快適な入浴方法を紹介していく。

41℃（よい）ふろプロジェクト

山形新聞

【平成 23 年 10 月 14 日】



入浴事故の防止  
羽黒山伏が訴え  
庄内保健所ポスター作製  
「修行も入浴も心構えは同じ？」—庄内保健所は冬季の入浴事故防止キャンペーンで、

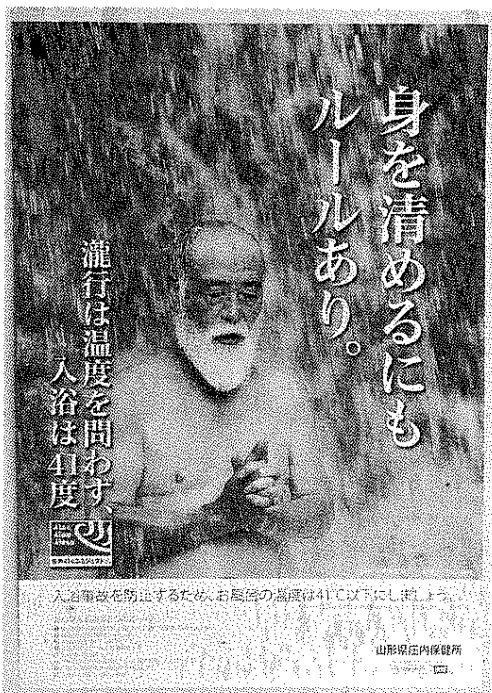
「お風呂の温度は41度以下に」など八つのルールを呼びかけている。

「修行にも入浴にもルールはある。まさにぴったりだよ」と星野さんは出来栄に太鼓判を押している。

# 「適温は41度以下」

## 山伏滝行の姿でPR

# 入浴事故防止ポスター作製 県庄内保健所



山伏の滝行で入浴事故防止を呼び掛けるポスター

県庄内保健所（松田徹所長）は、羽黒山伏が滝行を行う姿で入浴事故防

止を呼び掛ける異色のポスターを作製した。庄内地方ならではの啓

発をと企画した。山伏の滝行は古くは、神聖な山に入る前、湯垢離として

温泉水などで清め心身を再生させたのが起源で、日本の入浴習慣と深い関係があるとして決めたという。被写体になったのは鶴岡市羽黒町手向で宿坊を営み、年末年始の羽黒山松例祭で山伏の最上位「松聖」を務めた経験がある星野文紘（山伏名・尚文）さん（64）。今年8月上旬に湯殿山本宮近くの「御滝」で行われた山伏修行の滝行に職員が同行し、撮影した。

完成したポスターはB2判（縦約71センチ、横約51センチ）とA3判（縦約51センチ、横約71センチ）の2種類を制作し、700部を作製し、今月中に庄内地方の温泉施設や公共施設、観光施設などに配布する。同保健所のまとめによると、2009年11月から昨年10月まで庄内地方では、意識を失って倒れるなどの入浴事故が194件発生し、42人が死亡している。特に温度差の大きい冬季、高齢者の事故が多いことから、同保健所は昨年「41（よい）ふるジェクト」と銘打ち、入浴事故防止キャンペーンに取り組んでいる。

温で、明日への再生を薬しみたいもの」とコメント。700部を作製し、今月中に庄内地方の温泉施設や公共施設、観光施設などに配布する。同保健所のまとめによると、2009年11月から昨年10月まで庄内地方では、意識を失って倒れるなどの入浴事故が194件発生し、42人が死亡している。特に温度差の大きい冬季、高齢者の事故が多いことから、同保健所は昨年「41（よい）ふるジェクト」と銘打ち、入浴事故防止キャンペーンに取り組んでいる。

# 社説

冬本番を迎え、県内各地でも降雪が見られるようになった。特に冷え込みが厳しい日は家に帰って風呂に入るのが一番。体が温まり、夜はぐっすり眠れるからだ。しかし県庄内保健所（松田徹所長）によると、冬は入浴中に脳出血や心筋梗塞などを発症し、病院に収容されるケースが相次いでいる。このうち、多くの方が亡くなっており、交通事故による死者数よりはるかに多くなっている。

鶴岡市、酒田地区広域行政組合の両消防本部に2009年11月から救急要請があったケースを調べてもらっている。それによると、同年11月は発生が19件、死者は4人、12月は20件、4人だったが、寒さが厳しくなる翌10年1月は23件、8人、2月26件、5人、3月18件、4人、4月22件、5人だった。春以降はいずれもひと桁に減少したものの、再び同年11

## 入浴中の発症死亡

12/4 新山

# 全県で調査し啓発急げ

月には26件、11人と多くなり、今年1月は32件、12人、2月25件、7人、3月31件、6人、4月18件、7人で、死者はいずれも前年同期より増えている。

09年11月～11年8月の1年10カ月間の発生は410件、死者102人で、死者数のうち、65歳以上の高齢者は94人で大半を占めた。また同期間の交通死者数は

比較的短時間で起きるため、体からは汗が出て脱水症状となり、血の流れがどろどろに。浴槽から出るころには脳の血流が悪くなることもあるという。

こうしたメカニズムは「ヒートショック」と呼ばれており、しっかりした対応が必要と、県庄内保健所は▽体調が悪い時、酒を飲んだ時、血圧降下剤などを服

24人だったことから、入浴による死者の方が4・25倍多いという結果が出た。松田所長によると、暖かい居間から寒い脱衣所に行って服を脱ぐと、血管が縮んで血圧は20から30くらい上がる。さらに寒い浴室に入ると血圧が一層上昇。しかし、入浴することにより今度は血管が広がり、血圧は低下する。この変化は比

用した後は入浴しないようにする▽入浴前には脱衣所を暖める。浴室内も浴槽のふたを開け、シャワーを出したままにして温度を上げる▽浴槽内の湯の温度は41度以下にする▽入浴の前後に十分な水分補給をする▽などを「快適お風呂八つのポイント」として定めた。

法などを知らせようとポスターやリーフレットを大量に作り、関係機関に配布した。事故啓発キャラバンも各地で展開している。独自に「寒い日の入浴」と題した動画を制作し、動画投稿サイト「ユーチューブ」にアップした。

松田所長は「入浴による死者数は国内では年間1万4千人に上るといふ統計もある。決して軽視はできない。予防のポイント」は居間と浴室の温度差をできるだけ小さくすること。高齢者がいる場合は早めに対応してほしい」と話している。

県内では現在、県庄内保健所のみが調査を続けている。そこで1年10カ月間で102人の死者が出たという事実が判明した以上、調査の手を早急に全県に広げる必要がある。県は交通事故による死者よりはるかに多い人が入浴で亡くなっているという現実をしっかりと受け止め、各地区の実態を把握し、県民に対して効果的な啓発に乗り出してほしい。

# 入浴事故の死者72人

## 庄内地方 1 年 間

# 交通事故死者の4.8倍

# 冬場に多発、保健所が注意喚起



庄内保健所（松田徹所長）は、2010年11月から昨年10月までの1年間に庄内地方であった入浴事故の調査結果をまとめた。調査（09年11月～10年10月）と比べ、発生件数は72人になり、同期の交通事故死者（15人）の4.8倍に上った。前回は発生件数は250件、死者は72人になり、同期（10月）と比べ、発生件数は28.9%増、死者は30人、71.4%増と大幅に増加した。入浴事故は冬場に多く発生しており、同保健所は「一層腕と腕衣所、浴室の温度変化による急激な血圧上昇が入浴事故の要因。入浴前に浴室などを暖めるなど、入浴事故防止に向けた注意喚起を目的に庄内保健所が発行している「Newyoku Times」

ど注意してほしい」と呼び掛けている。全国人口動態統計などから推計したところ、県内に入浴事故に伴う死亡者が高いことが分かった。同保健所が09年から鶴岡市消防本部と酒田地区広域行政組合消防本部の協力で、庄内地方であった「入浴行爲」「入浴し始める」「入浴中」「入浴後」の4段階を分析し、入浴事故の発症を調査している。

昨年10月までの1年間、寒い日が多かったため、死者のうちの65歳以上の高齢者が62人上り、50代3人、40代2人など。「入浴行爲」に起因する事故は、高齢者に限らない。働き盛りの世代も若年層も注意が必要」と同保健所は指摘する。発生件数、死者ともに前年調査と同程度だった。同保健所は「庄内41℃（より）よりキャンペーン」を展開し、警察との

リーフレットや「Newyoku Times」に「お風呂の温度は1度以下」「浴室のドアを開け、シャワーを使い浴室を暖めて」「入浴前は掛け湯をして体を慣らす」など注意を呼び掛けている。各種イベントや消防の応急手当講習会、自治会の研修会などから啓発

活動を展開しており、同保健所は「入浴事故は高齢者、気温が低い日、自宅が多いという傾向にある。これまでの調査では、発見が早かったため心臓停止状態から蘇生したケースもあり、高齢者の方は家族に一声掛けてから入浴する、家族も頻りに声を掛けてほしい」と話している。

【平成 24 年 1 月 18 日(水)】

# ほっとタイム

庄内保健所が調査した入浴事故のデータを驚いた。昨年10月までの1年間で、入浴行為に起因する事故が庄内地方で250件あり、72人が亡くなった。同期間の交通事故による犠牲者の5倍近くに上るといふ。

鶴岡、酒田の消防本部の協力で、救急要請のあったケースを分析したもので、同保健所が3年前から独自に継続調査している。これまでの調査から、入浴事故は「高齢者、気温が低い日、自宅」で多く発生する傾向が分かってきた。亡くなるケースは心筋梗塞や脳卒中が多いという。今の季節は特に注意が必要だ。

入浴行為で亡くなる事故には注意を

度防げると、保健所の担当者はみる。発見が早かったため、心肺停止状態から蘇生したケースがあり、入浴時に家族間で声を掛け合うことが肝要だといふ。

さらには、暖かい居間と寒い脱衣所や浴室との温度差を少しでも解消する工夫が大切だと。寒に入り、層通りの冷え込みが続くこのころ、心身をゆったりとさせてくれる入浴ではあるが、注意を心掛けたい。(1/18 庄内日報(森))

毎日新聞

【平成 24 年 2 月 9 日(木)】

## 庄内保健所 入浴事故調査

入浴時に起きる事故の三つのキーワードは「寒い日」「自宅」「高齢者」。庄内保健所がまとめた「入浴事故実態調査」から、入浴事故の実態が改めて浮かび上がった。庄内保健所が09年から独自に実施している全国的にも珍しい調査で、「寒さはまだまだ続く。住居内の温度差をなくすなどの自衛策をとる」ことを呼びかけている。

【佐藤伸】

調査は、鶴岡市消防署と酒田地区広域行政組合消防署の協力で09年11月から11年10月までの2年間で、庄内地方を対象に行い、気候との関連や年代、風呂の種類などについてまとめた。

入浴事故件数は44件でうち死者は11人、4人。これは、同じ期に、「寒暖差」が事故

調査は、鶴岡市消防署と酒田地区広域行政組合消防署の協力で09年11月から11年10月までの2年間で、庄内地方を対象に行い、気候との関連や年代、風呂の種類などについてまとめた。

入浴事故件数は44件でうち死者は11人、4人。これは、同じ期に、「寒暖差」が事故

# 住居内の温度差なくせ

## 寒い日 自宅 高齢者

に大きく影響している。死者も1月20日、11月15日、12月14日と、寒い季節に集中している。通報時間帯は「午後4〜7時」と「午後8〜11時」が約3割と多かった。また死者の9割以上が65歳以上の高齢者で、病気がない人も19人いた。

発生時期は入浴中72・3%、入浴後23・4%で、死者11人のうち入浴中10人、入浴後4人だった。

病気がない人も19人いた。

死者も1月20日、11月15日、12月14日と、寒い季節に集中している。通報時間帯は「午後4〜7時」と「午後8〜11時」が約3割と多かった。また死者の9割以上が65歳以上の高齢者で、病気がない人も19人いた。

発生時期は入浴中72・3%、入浴後23・4%で、死者11人のうち入浴中10人、入浴後4人だった。

病気がない人も19人いた。

## 交通事故死の5倍弱

と脱衣所、浴室の温度差をなくす③家族同士(282件)、温泉施設などの大浴場(屋内)20・7%、介護施設など10・4%。発生場所は浴槽内48・6%、浴室内は9番目に多かつた。

と脱衣所、浴室の温度差をなくす③家族同士(282件)、温泉施設などの大浴場(屋内)20・7%、介護施設など10・4%。発生場所は浴槽内48・6%、浴室内は9番目に多かつた。